紀伊民報
(5)
2008年(平成20年)4月8日 火曜日

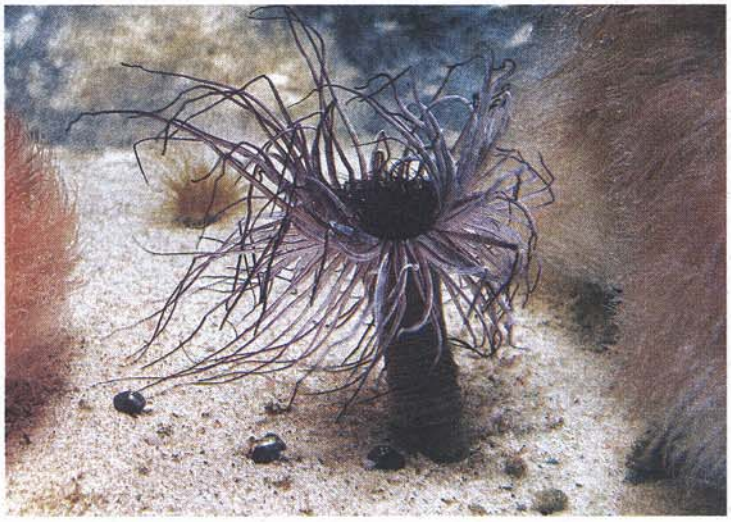
水族館へ行こう!

39

ハナギンチャク

京都大学白浜水族館

深見 裕伸



△砂や泥でつくった棲管を持つムラサキハナギンチャク(水槽番号202)

まるでミノムシ

ハナギンチャクは、外見がイソギンチャクにそっくりなため、同類と思っている人が多いかもしれない。しかし、ハナギンチャクは、体の内部構造の違いから分類学的にはイソギンチャクやイシサンゴと異なるグループに入り、最近の研究でかなり遠縁であることが分かってきた。

生息場所は基本的に水深3~5㍍の砂地である。このハナギンチャクの最大の特徴は、体から出す粘液と周囲の砂や泥を合わせて灰色のぶよぶよとした棲管(せいかん)を、ミノムシのように体の周囲につくり出すことである。

また、見た目からは想像できないほど俊敏で、触れると一瞬で砂の中に潜ってしまう。その時、無理に捕まえようとすると、棲管を残して消えてしまう。まるで、トカゲのしっぽ切りである。その後、数日かけて新しい棲管をつくるのである。

白浜水族館で飼育する際には、最初にわざと棲管を取って新たにつくらせる。そうすることで新しい環境になじむようだ。

普段は、多数の細長い触手を持った口と体の上部を砂の上に出している。一見すると、イソギンチャクの一種であるスナイソギンチャクと間違えることがあるのだが、棲管の有無で簡単に判断できる。

白浜水族館では、ムラサキハナギンチャクという大柄で触手の色が美しい種類と、少し小柄のヒメハナギンチャクを展示している。ムラサキハナギンチャクは、名前の通り紫色の触手を持っているものもいるが、実は白や黄などさまざまな色がある。ヒメハナギンチャクは砂地にもいるのだが、小さな岩が転がっている転石地帯でよく見られる。

昔の白浜には、これら2種が多く生息していたらしいが、現在は探さなくては見つからないほど少ない。ただ、最近はこの海域で一度いなくなった生物が戻って来つつあるのが救いである。注目されない生き物でも元気に生きていける環境を守っていきたいものである。

(京都大学助教)